

笥 文 生 著
〔東洋學叢書〕

唐宋文學論考

刊 行 創 文 社

寛 文 生 (かけひ・ふみお)

1934年、東京都生れ。1962年、京都大学大学院文学研究科博士課程（中国語学・中国文学専攻）修了。現在、立命館大学特任教授。

〔主な著書〕『梅堯臣』（岩波書店）、『韓愈 柳宗元』（筑摩書房）、『成都重慶物語』（集英社）、『唐宋八家文』（角川書店）、『風呂で読む唐詩選』（世界思想社）、『風呂で読む李白』（世界思想社）、『漢語の散歩道』共著（かもがわ出版）、『四庫提要北宋五十家研究』共著（汲古書院）など。

〔唐宋文学論考〕

二〇〇二年六月二五日 第一刷印刷
二〇〇二年六月三〇日 第一刷発行

著 者 寛 文 生

発 行 者 久 保 井 浩 俊

印 刷 者 藤 原 良 成

発 行 所 鉄 創 文 社

〒151-8533

東京都千代田区麹町二一六七一

電話〇三—三三六三—七〇一

振替〇〇二二〇〇—九二四七二

<http://www.sobunsha.co.jp>

著者との申し合せにより検印省略

藤原印刷・鉛本製本

ISBN4-423-19255-1

Printed in Japan

序章 「辞は達するのみ」か

一

「辞は達するのみ」という言葉は、『論語』衛靈公篇に見える一条である。

孔子の言行録である『論語』の原文は、「辞達而已矣」のわずか五文字で、この言葉がどういう状況の下で発せられたのかについては、なにも記していない。しかし、前漢の孔安国が「凡そ事は実より過ぐるは莫し。辞は達すれば則ち足る。文艶の辞を煩わさず」（『論語注疏』）と注し、南宋の朱熹（一一三〇—一二〇〇）が「辞は意を達するを取れば止む。富麗を以て工みと為さず」（『論語集注』）と釈しているように、一般には、

言葉あるいは文章は、意思を伝えることができれば、それで十分だ。余計な修飾語などなくてよい。

というほどの意味に解釈されて来た。江戸時代の荻生徂徠（二六六—一七二八）『論語徴』や清の錢大昕（一七二八—一八〇四）『論語答問』が、「辞」を春秋時代の「辞命」、すなわち外交使節が自国の君主の意向を相手の君主に伝える辞と解釈したのは、『論語』本来の意味であったとしても、唐宋の人びとに共通する理解では必ずしもなかったであろう。

なお荻生徂徠が、清朝を代表する考証学者の錢大昕に先立って、彼とほぼ同じ解釈をしていたことは、注目され

てよいであろう。錢大昕は、実に荻生徂徠が亡くなった年に生まれているのである。

参考までに、少し長くなるが、『論語微』および『潜研堂文集』巻九「論語答問」の説を引いておく。

『論語微』「辞は達するのみ」

「聘礼」の記に曰く、「辞は常無し。孫しんいて説よろばしうす。辞多ければ則ち史となり、少なければ則ち達せず。辞は苟くも以て達するに足るは、義の至りなり」と。按ずるに凡そ言の文を成せる之れを辞と謂う。而うして此れは辞命を謂うなり。

春秋の時、辞命を為す者は、率ね虚誇して俗を成し、競いて文飾を以て相い高うす。両国の情、因りて以て達せず。故に孔子云うこと爾り。後世 字義を審らかにせず、誤りて以て言語の道みな然りと為し、達を以て達意と為すは、非なり。

夫れ言語の道は一ならず、或いは簡或いは繁、或いは婉或いは直、何ぞ必ずしも通快明暢を取りて善と為さんや。故に左伝に載す「孔子曰く、志に之れ有り。言は以て志を足し、文は以て言を足す。言わずんば誰か其の志を知らん。言の文なきは、行われて遠からず」と。

夫れ聖人の道を文と曰う。文とは、物相ものあひに雜まじわるの名にして、豈に言語の能く尽くす所ならんや。故に古えの能く言う者は之これを文る。其の道に象かたどるを以てなり。其の包かみる所の者広きを以てなり。君子何ぞ明暢備悉を用うることを為せんや。故に孔子嘗て曰く、「黙して之を識る」と。道の言語を以て解くべからざるが為の故なり。孟子よりして下、此の道汎ひろびたり。務めて言語を以て道を尽くさんと欲するや、以て知らざる者の前に聒争す。

夫れ人は言を以て喻すべからざるなり。況んや言を以て其の心を服すべけんや。故に其の言の明暢備悉は、適まさに以て一偏の説たるに足るのみ。故に性善・性惡、万古に聚訟す。程朱の性理は、堅白の辯たるに過ぎず。

悲しい哉。此れ未だ必ずしも此の章を誤解するに因らずんばあらざるなり。学者諸を察せよ。

〔口語訳〕

『儀礼』『聘礼』の記（ノート）に、「辞（応対の言葉）には、所定のルールがあるわけではなく、控えめにこやかに応対することが大切。辞が多すぎると、史官の祝詞のりことみたいになるし、少なすぎると、相手に主君の意向が伝わらない。相手に過不足なく伝わる辞こそ、最高の応対といえよう」と言う。一般に言葉を文字化したものを「辞」というが、ここでは「辞命」の意味。

春秋時代、「辞命」すなわち他国に君命を伝える使節の多くは、虚偽と誇張で塗り固めるのが普通で、競って言葉を飾りたてて、自国を持ち上げようとしたので、お互いの意思が相手国に通じなくなった。だから孔子がこう言われたのである。後世その意味が分からなくなつて、言葉の道すべてについての意見だと思ひこみ、「達」を「達意」と誤解してしまつたのである。

そもそも言葉の道は一つではないのであつて、簡潔に言う時もあれば、詳細に述べる時もあり、また遠まわしに言う時もあれば、ずばつと指摘する時もある。簡単明瞭であればよいというわけではない。だからこそ『春秋左氏伝』（襄公二十五年）に次のような言葉を載せているのである。

孔子が言われるのに、古書に次のように言う。「言葉はその人の意思を補い、文彩は言葉を補ってくれる。もし言葉に出さなければ、誰もその人の意思を知ることができないし、言葉に文彩がなければ、遠くまで伝えることはできぬ」と

そもそも聖人の道を「文あや」という。「文」とは、『易』繫辭伝下にあるように、物（爻）が交錯することであつて、言葉で言い尽くせるはずがないのだ。だから昔の弁の立つ者が言葉を飾るのは、道にかたどつたからで

あり、内包するものが広いからである。君子たるもの明快に隅々まで言い尽くす必要などない。孔子が「黙つていても分かる」(『論語』述而篇)と言われたのは、言葉で道を説明できないからである。孟子以後になると、この道は亡びてしまったのに、なんとか言葉で道を説明し尽くそうとするから、何も分からぬ者の前でわめきたてることになるのだ。

そもそも人は、言葉で分らせることなど出来ない。まして言葉で相手を心服させることなど出来るわけがない。だから言葉で明快に隅々まで言い尽くしたところで、それは無数にあるうちの一つの説に過ぎないのだ。だから性善説と性悪説が未来永劫にわたつて言い争っているのである。程子や朱子の性理説も堅白同異の弁と同じで、詭弁に過ぎないのだ。悲しいことに、これは必ずしも『論語』のこの章を誤解したからでないとは言えないのである。学生諸君、ここををよく理解してほしい。

「論語答問」

問う、「辞は達するのみ」と、此の「辞」は何の指す所ぞ。

曰く、三代の世、諸侯は邦交を以て重しと為す。『論語』に「四方に使いして、君命を辱しめず」と、則ち之を称う。「四方に使いして、専対すること能わず」と、則ち之を譏る。此の「辞」は、即ち「専対」の辞なり。『公羊伝』に「大夫出でて使いするに、命を受くるも辞を受けず」と。『聘礼』の記に、「辞は常無く、孫しんいて説よさばしうす。辞多ければ則ち史となり、少なければ則ち達せず。辞は苟くも以て達するに足るは、義の至りなり」と。『論語』の文は、『礼経』と相い表裏す。経を以て経を証す、以て「辞達す」の義を知るべし。

〔口語訳〕

質問。『論語』に「辞は達するのみ」とありますが、この場合の「辞」とは、どういう意味でしょうか。

答え。夏・殷・周の時代、諸侯は国と国との外交を重視した。『論語』（子路篇）に、「四方の隣国に使者として赴き、主君を辱めないように、その命令を正確に伝える」というのは、使者を褒めているのだ。同じく「四方の隣国に使者として赴き、臨機応変に対応できない」というのは、使者を譏っているのだ。したがって、この場合の「辞」は、臨機応変に対応する「辞」の意味である。『公羊伝』（莊公十九年）に「大夫が外国に使者として出向く時は、主君の意向を体して行くのであって、臨機応変の対応まで拘束されるわけではない」とある。また『儀礼』『聘礼』の記（ノート）に、「辞（応対の言葉）には、所定のルールがあるわけではなく、控えめずにこやかに応対することが大切。辞が多すぎると、史官の祝詞のりとみたいになるし、少なすぎると、相手に主君の意向が伝わらない。相手に過不足なく伝わる辞こそ、最高の応対といえよう」とある。『論語』の文は、『礼経』と相い表裏しているのであって、経書を使って経書の意味を明らかにすれば、「辞達す」の意味を知ることが出来るのである。

すでに荻生徂徠も指摘しているように、孔子は「辞は達するのみ」とは相矛盾するかに見える「言の文無きは、行なわれて遠からず」という古書に見える言葉を肯定的に紹介していることも、一般によく知られている。すなわち『春秋左氏伝』襄公二十五年に見える一節である。

仲尼曰く、志（古書）に之れ有り。「言は以て志を足し、文は以て言を足す。言わずんば、誰か其の志を知らん。言の文無きは、行なわれて遠からず」と。晋、伯（霸）為るに、鄭、陳に入る。文辞に非ざれば、功を為さじ。辞を慎まん哉。

仲尼すなわち孔子がこの語を発したのは、次のような史実をふまえてのものだった。

襄公二十五年（西暦五四八）六月、鄭の公孫子展が子産とともに軍を率いて陳の都を攻略した。子産は、軍服を着たままで、当時の覇者であった晋の国へ、戦勝報告に行つた。不快感をあらわにした晋は、子産に対して、① いったい陳にどのような罪があつたのか、② なぜ陳のような小国を攻めたのか、③ そもそもなぜ軍服を着たままで報告に來たのかなどと問いただした。これに対し、子産は大略次のように答えた。

①「陳は、周の武王がその長女太姫を虞闕父の子の胡公に嫁がせて封建した国であつて、今に至るまで、周の恩恵に浴しております。陳の桓公の跡目争いが起こつた時、わが鄭の先君莊公は、桓公の弟五父を推して位につけましたが、蔡の人は、蔡の血筋を引く桓公の子の厲公を立てようとして、五父を殺してしまいました。そこで、鄭はやむなく厲公を立てることに同意しました。その後の莊公・宣公も、わが鄭の後押しで位についたのです。陳の大夫夏徵舒が靈公を殺した時も、わが鄭は、他国に流亡していた靈公の子成公を呼びもどして位につけました。ところが最近の陳は、周の大徳を忘れ、鄭の大恩を軽んじて、わが国との姻戚關係を絶つ一方で、楚の大軍を待みにし、わが国を威嚇して來ました。そこで昨年来、陳を討つことを晋にお願ひしているのですが、未だにお許しが出ておりません。そこへわが国都の東門に陳が攻めこんで來たのです。陳の軍隊が通つた後は、井戸は埋められ、林は切り倒されてしまいました。鄭は、このままでは国力が衰えて、周の武王の長女太姫様の靈を辱めることになるのではないかと心配でした。幸いにも天が私たちの心配を汲みとって下さつたおかげで、陳はみずからの罪を悟り、降伏して來ました。ご報告に参つたのは、そのためでございます。」

②「先王の掟によりますと、罪を犯した者には、その罪状に従つて罰を与えよ、とあります。（陳には処罰を受けるべき理由があるのです。）それに昔は、天子の土地は方千里、諸侯は方百里、それより以下は、その等級によつて小さくなるよう決められておりました。ところが今は大きな諸侯になると方数千里もあるではありませ

んか。大国が小国の土地を侵略しなければ、こんな状況にはならなかったでしょうに。（晋も小国の土地を侵略して、今日の大を成したのではないのですか。）」

③「わが鄭の先君の武公・荘公は、周の平王・桓王の卿士でしたし、城濮の戦いでは、あなた方の晋の文公が、諸侯に対して、それぞれ元の職務にもどるという命令を発せられ、わが鄭の文公には、軍服を着たまま、周王を補佐して、楚国からの戦利品を受け取るようにと言われたのでございます。今日、軍服を着たまま参ったのも、王の決まりを守っているからに他なりません。」

こうして晋側は、それ以上、鄭の落度を追及することが出来なかったという。

孔子の見解は、このような記事の後に、発せられているのである。

古書に次のように言う。「言葉はその人の志向を完全なものにし、文彩は言葉を完全なものにする。もし言葉に出さなければ、誰もその人の志向を知ることはいえないし、言葉に文彩がなければ、遠くまで影響を及ぼすことはできぬ」と。晋は覇者であったにもかかわらず、鄭は事前の了解なしに、陳に攻め入った。もしも鄭の子産による理路整然とした答弁（文辞）がなければ、晋を納得させることはできなかったはずである。さても辞というものは、慎重にしなければならぬ。

孔子が言ったこの場合の「辞」は、一般的な言葉や文章の意味ではなく、明らかに荻生徂徠や錢大昕が主張する春秋時代の「辞命」、すなわち外交使節が自国の君主の意向を相手の君主に伝える辞の意味であろう。ただし、孔子が引用した古書の言葉「言は以て志を足し、文は以て言を足す。言わずんば、誰か其の志を知らん。言の文無きは、行なわれて遠からず」は、そのような限定された意味ではないことも明白である。

「辞は達するのみ」(言葉あるいは文章は、意思を伝えることができれば、それで十分だ。余計な修飾語などなくてよい)

「言の文無きは、行なわれて遠からず」(言葉に文彩がなければ、遠くまで伝えることはできぬ)

この一見相矛盾しているかに見える孔子の二つの主張は、どう理解し、どのように受け止めればよいのであろうか。

北宋を代表する文学者である蘇軾(一〇三六—一一〇一)が、この問題に対するみずからの見解を「謝民師推官に与うる書」の中で披瀝したのは、その最晩年のことであつた。謝民師に与えた書とは、海南島に流されていた蘇軾が、恩赦によつて北へ帰る途中、広州の推官(幕僚)をしていた謝民師から自作の詩文の批評を求められたのに答えた手紙のこと。関係する部分を次に引いてみよう。

示さるる所の書教および詩賦雜文、之を觀ること熟せり。大略は行雲流水の如く、初めより定質無し。但だ常に当に行くべき所に行き、常に止まらざる可からざる所に止まる。文理自然にして、姿態横生す。

孔子曰く、「言の文ならざるは、行なわれて遠からず」と。又曰く、「辞は達するのみ」と。

夫れ言は意を達するに止まれば、即ち文ならざるが若きを疑うも、是れ大いに然らず。物の妙を求むるは、風を繋ぎ、影を捕うるが如く、能く是の物をして心に了然たらしむる者は、蓋し千万人にして一たびも遇わざるなり。而るを況んや能く口と手とに了然たらしむる者をや。是れを之れ「辞達す」と謂う。辞能く達するに

至らば、即ち文用うるに勝^たう可からず。

〔口語訳〕

お寄せ下さったお手紙と詩賦・雑文は、とくと拝読いたしました。全体として見れば、行く雲や流れる水のように、まるできまつた型というものがなく、それでいて常に行くべきところに行き、止まらねばならぬところに止まっております。文脈も自然で無理がなく、自由自在で生き生きしています。

孔子は「言葉に文彩がなければ、遠くまで伝わらない」と言い、また「言葉は、意思を伝達できればそれだよいのだ」とも言っています。

そもそも言葉が単に意思を伝達するだけでよいのなら、文彩など必要でないように見えますが、実際は全く違うのです。物事の妙趣を求めることは、風をつかまえ、影をとらえるように難しく、心の中に適確に再現できる者は、千人・万人の中で、おそらく一人もいないでしょう。まして言葉や文章にはつきり再現できる者においてをやです。このような至難の業を、孔子は「言葉は意思を伝達する」と言われたのです。言葉が物事の妙趣をとらえられるようになれば、その文彩は使いきれないほど豊かになるでしょう。

つまり孔子の述べた「辞は達するのみ」と「言の文無きは、行なわれて遠からず」という二つの主張は、蘇軾にとっては、相対立して捉えるような低次元のものではなく、もっと高い次元で理解すべきものだったのである。つまり「意思を正確に伝達する」ということは、「物事の本質を適確に捉える」ことができてはじめて可能なのであって、小手先の技術で表現できるようなものではない。物事の本質を適確に捉えられるようになれば、おのずと文彩も豊かになるのである。

謝民師の文章に対する「行雲流水の如し」云々という蘇軾の批評は、実は彼自身のあるべき理想像を表明したも

のでもあった。よく知られているように、彼は「自評文」(『東坡題跋』卷二)の中で、次のようにみずからの文章を誇らかに評している。

吾が文は、万斛の泉源の如く、地を挾はずして皆出ずべく、平地に在りては滔滔汨汨とうとうくとして、一日千里と雖ども難きこと無し。其の山石と与に曲折するに及んでは、物に随いて形を賦し、而も知るべからざるなり。知るべき所の者は、常に当に行くべき所に行き、常に止まらざるべからざるところに止まる。是くの如きのみ。其の他は吾と雖ども亦た知る能わざるなり。

〔口語訳〕

わたしの文章は、無尽蔵の水が湧き出る水源のように、どこからでも湧いて出る。平地では、ほとばしるようにとうとうと流れて、一日千里の距離も難なく飛ばす。岩山の斜面を曲がりくねって流れ落ちる時は、ぶつかる相手によって自在に形を変えるが、それは無意識のうちにそうなるのだ。分かっているのは、常に行くべきところに行き、常に止まらねばならぬところに止まるという、ただそれだけのこと。それ以上のことは、わたし自身にも分らない。

蘇軾が晩年に到達した「常に当に行くべき所に行き、常に止まらざる可からざる所に止まる」という境地こそ、孔子が七十歳にして到達したという「心の欲する所に従って、矩かねを踰こえず」(『論語』為政篇)そのものであった。そしてそれは、中唐の韓愈が「文従い字順いて各おの職を識る」(『南陽樊紹述墓誌銘』)と主張したことを、最も理想的な形で完成させたとも言えるのである。

六朝の貴族社会で発達した四六駢儷文がその役割を終え、中唐の韓愈や柳宗元によって古文が主張されて三百年、北宋の欧陽修、そしてその弟子である蘇軾らによって、新しい散文「古文」は、完成の域に達したのである。

目次

序章 「辞は達するのみ」か	i
---------------	---

第一部 古文運動史の諸相

一 古文運動略史	五
二 陳子昂の散文評価をめぐって	五
三 張説の散文について——唐代古文の源流	六
四 日本における韓愈研究——韓愈學術討論会、一九八六年十二月、汕頭市	八
五 中国における韓愈評価をめぐって	六

第二部 柳宗元の思想と文学

目次	
一 柳宗元——唐代の合理主義的思想家	二
二 柳宗元詩考	三
三 柳宗元「童区寄伝」考	四

四 柳宗元「宋清・郭橐駝・梓人伝」考	一五五
五 柳宗元「封建論」をめぐる	一六八
六 柳宗元「天の説」をめぐる	一七〇
七 日本における柳宗元研究——柳宗元国際学術討論会、一九九三年八月、柳州市	一七七
付一 章士釗『柳文指要』（書評）	一七九
付二 施子愉『柳宗元年譜』（書評）	一八五
付三 下定雅弘「柳宗元の『漁翁』・『江雪』二首について」（書評）	一三〇

第三部 李白論

一 李白と「竹溪の六逸」	二三五
二 李白と高適	二四〇
三 『邊牀』考——李白「長干行」ノート	二六〇
四 『吹不尽』考——李白「子夜吳歌」ノート	二七四
付一 李白の奔放——酒と弱い女を詠む	二九五
付二 酒仙李白の実像を求めて	二九九

第四部 唐宋文学の諸相

目次	
一 李邕伝初探	三〇三
二 “麻の如し”考——杜甫「茅屋為秋風所破歌」ノート	三六六
三 高適伝——『旧唐書』卷百十一	三四四
四 岑参伝——「岑嘉州詩集序」	三五八
付一 平野顯照『唐代文学と仏教の研究』（書評）	三七一
付二 植木久行『唐詩の風土』（紹介）	三八三
付三 西園寺文庫『唐百家詩』について（紹介）	三八六
付四 杜甫誕生一二五〇周年（紹介）	三八八
付五 太田次男『中唐文人考——韓愈・柳宗元・白居易』（書評）	三九五
五 宋代散文論	四〇五
六 梅堯臣略説	四一七
七 梅堯臣詩論	四三七
付一 詩人とレットテル	四七三
付二 曾棗莊・金成礼『嘉祐集箋注』（書評）	四七五
付三 『蘇東坡詩集』への期待（紹介）	四八〇

付四	曾棗莊等著『蘇軾研究史』序	四三
付五	日本における蘇軾——第十三回蘇軾學術研討會、二〇〇一年八月、眉山市	四五
	あとがき	四九
	初出一覧	四三
索引		7